

高志の海 松隈義勇

——『おくのほそ道』に関するエッセー——

奈呉の浦

ことしは偶然にも日本海に親しむ機会が多かった。湘南の海べで育った私は、日本海とはわりあい疎遠であった。それがことしの半ば、初夏のひとり旅で長州萩の美しい海の眺めをほしひままにし石見の海をのぞいたりしたのに始まって、越中・南能登・加賀・越前にわたる芭蕉研究のゼミ旅行でも日本海に親しむ時間を多く持ち、さらに秋には越後路を巡って荒海の景観にも接し得たのである。

研修旅行の折りの最初に相見た海は奈呉の浦であった。富山からバス、タクシーと乗り継いでたどり着いた新湊市の放生津八幡宮には、「早稲の香やわけ入右は有磯海」の芭蕉句碑があるが、その裏手はすぐ海で、防波堤上に「奈呉之浦」の標柱が立っている。左手に能登半島が浮かぶ勝景だが、堤の下をのぞくと、どここの海岸にも見られるテトラポットが置かれ、何を通すのか鉄管が幾本も敷設されていて幻滅である。放生津と呼ばれ佳景をうたわれた潟湖も今は掘り広げられて富山新港に変わり、巨大な外国船などが入港しているのを見た。

八幡宮の境内には海を背にして万葉の歌碑が立っている。

あゆの風いたく吹らし奈呉の海人の釣する

小舟こき隠る見ゆ

という大伴家持の詠である。家持は若冠二十七歳で越前の国守になりこの地に満六年間在任した。その遺跡は多くあるが、放生津から行って庄川（射水川）が伏木港になっている、その港内を渡船で横切った町の小高い所にある勝興寺という大きな禅寺が、越前の国府の跡ということで、境内に立って遠く万葉の古えをしのんだ。

万葉末期の歌人家持のことについては昨今急に脚光が浴びせられた観がある。山本健吉氏の『大伴家持』によれば、歌人としては、不器用な作家だが、「人間存在の『かなしみ』が漂っている」がゆえに、人々の心をとらえるのだ、という。近代人にも共通しそうな人間の深奥からにじみ湧いてくるようなそこはかといひ悲しみを歌った特異な古代歌人というべきだろう。

越中路で芭蕉があこがれた「那古の浦」も「有磯海」も「擔籠の藤波」も、つまるところ家持によって現わされた歌枕である。ただ

芭蕉どの程度家持個人に関心を持っていたかは疑問である。

さて「有磯海」がどこをさすかは諸説あるが、大体能登半島の東南部、富山湾沿いの雨晴の海岸あたりかとされる。岩礁が多く、岩のない砂浜には松林が連るといふ景勝の地である。加賀を目ざして早稲田の路を進めば右手遙かに有磯海が指呼されるわけである。

私たちは海水浴でにぎわう雨晴を過ぎてさらに北進して氷見という町に行つて泊つた。漁師町だが、落着きと情緒のあるいい町である。芭蕉の旅では、曾良の『随行日記』に「氷見へ欲行不往」と記されている。氷見の近くに名所「擔籠の藤波」があるので行きたかつたにちがいないが、その日暑気甚だしく、芭蕉の気分もすぐれなかつたので断念したらしい。『おくのほそ道』の本文には、

擔籠の藤波は春ならずとも初秋の哀とふべきものをと、人に尋れば、是より五里いそ伝ひしてむかふの山陰にいり、蟹の苦ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじといひをどされてかゞの国に入。

わせの香や分入右は有磯海

と潤色されている。芭蕉は伏木あたりから左折して一路加賀へ向かつたのであろう。

とにかく私たちは芭蕉の心残りを引継いだ気持で氷見に行き、擔籠の藤波を尋ねた。氷見の南郊下田子の田圃の奥にある田子浦藤波神社。境内は老木が茂り、藤の大樹が目を驚かす。花の盛りはさぞかしと思われる。ここにも家持の歌碑がある。

日本海も富山湾に面するあたりは実に静かで海岸線も美しい。奥能登まで足を伸ばしたいのは山々だが、芭蕉とは関係がないので諦

め、能登金剛の奇勝、羽喰の浜など見て、能登路と別れた。

種の浜

金沢、那谷、永平寺などしばらく海と縁の切れた旅だったが、加賀で再び日本海と会つた。敦賀半島を東の湾沿いに進むと、字泉の金ヶ崎に着く。その金前寺には「月いづく鐘は沈める海の底」の芭蕉句碑がある。沈鐘伝説に因んで金ヶ崎と名づけられた地で、芭蕉はその伝説を聞いてこの句を作つたのである。寺の少し先の湾に臨む所が金崎城址で建武の戦いの遺跡。背後は樹木が鬱蒼と茂り、昼間でもひぐらしが鳴きしきり、前は敦賀湾一帯の絵のような風光が一望に見下される勝地である。

しかし芭蕉追慕の旅ではなんといつてもその先の色の浜(種の浜)が最大のお目当てである。『ほそ道』本文には、

十六日、空齋たれば、ますほの小貝ひろはんと、種の浜に舟を走す。海上七里あり。(中略)追風時のまに吹着ぬ。浜はわづかなる海士の小家にて、佗しき法花寺あり。爰に茶を飲酒をあたゝめて、夕ぐれのさびしき感に堪たり。

寂しさや須磨にかちたる浜の秋
浪の間や小貝にまじる萩の塵

其日のあらまし、等裁に筆をとらせて寺に残す。

とある。芭蕉は人里離れたわびしい漁村の寂寥の風情を極力表現しようとしているようだ。ただし「夕ぐれのさびしき感に堪たり」といつてはいるが、風流めかしたポーズがちらついているうらみがある。そういう所が俳諧の味わいだといえばそのとおりだろうが、少

なくも『ほそ道』全編の主題情調からみれば異質の感じである。

『ほそ道』の構想の上に源氏物語の影響が見られることは、志田義秀博士以来すでに幾人かによって言われていることだが、ことに福井で俳人等裁の家を訪れるくだりが夕顔の巻に、種の浜のくだりが須磨明石の巻におもかげ上の近縁があることはほぼ定説と見ていだろう。そこで芭蕉が自分を源氏の君にならずらえながら俳諧化しようとする姿勢が、あるいは風流のポーズを生み、あるいは種の浜の秋色をことさらに須磨よりまさったものにしよとする観念的な作句をなさしめた、といえないこともない。

それにしても、色の浜は最近の写真などで見ても、広くもない砂浜に漁舟や網などが昔ながらの姿に干し並べてあって、もの色びた蟹の里の感じが横溢している。だから私たちもずいぶんあこがれていたのである。ところが近年色の浜の先の浦底に原子力発電所が建設されたため湾沿いの道路も整備されているし、夏期のことと海水浴客が民宿に入り込み、ざわめいた人里になってしまっていた。

『ほそ道』に「色しき法花寺」と書かれた日蓮宗本隆寺はこの里の中心地にある。本堂前に句碑があり、萩の小株など植え添えられている。等裁が寺に書き残した文章はこの寺の宝物になっている。その文末に

小萩ちれまずほの小貝小盃 桃青

の句が記されている。句碑はこの句を刻んだものである。句意は、この浜でとれる赤いまずほの小貝を入れてもてあそぶ小盃の中に、萩の花の散り入る趣向に興じたものである。風雅の酒宴の感興を包んでいる。等裁の文に「小貝を拾ひ袖につつま、盃にうち入らんと

……」とあることで、小貝を盃に入れることがわかる。水を満した中に入れると、発色して鮮やかさを増して見えるのである。

まずほの小貝は西行の『山家集』の歌に「潮染むるまずほの小貝拾ふとて色の浜とは言ふにやあるらん」とあることによりこの浜の名物とされる貝で、学問上の名はチドリマスホガイというのだそうである。まずほとは赤い色を表わす古語であるが、この貝の色は薄紅で黄褐色を帯びたものもある。非常に小さく長さ一センチ内外、美女の小指の爪のふせいで、萩の花にも似ている。芭蕉は萩の花を嘯目したのか、連想によるものか、いずれにせよ季節の花との近似を見留めて美しい句に仕立てたのはてがらである。

「小萩ちれ」の句は「こ」の頭韻を重ね重謡めいた躍動があり、織麗であり艶でもあり、この旅の句中で珍らしい明るい句である。これを捨ててなぜ「浪の間や」という形に改作したのか。いうまでもなく『ほそ道』全巻中に置いてもこの句は異質であるし、ことに種の浜の寂しき中心の描写にそぐわないからにちがいない。「浪の間や」は全く写生的に変質させられている。「萩の塵」は萩の落花、花屑である。薄紅の小貝と萩の花屑、色も形もよく似た美しい物がまじりあって、静かに寄せ返すさざ波に水際の砂の上でもてあそばれている情景は目に鮮やかに浮ぶ。

「小萩ちれ」の句には女性美の世界を想い浮かべさせる余情があるが、「浪の間や」の句にも薄められてはいるがやはりその色どりは引継がれている。源氏物語のほのかな影が映っていそうだ。

私たちは浜に下り立ってまずほの小貝を捜した。この砂は褪黄褐色の赤みを帯びている（貝は保護色で赤みを増すのであろう）。静かな波のひたひたとする辺の砂を手で掘ってみると、数えられる

ほどもないが、小さな薄紅の貝が出てくるのだった。

なんとあえかにも美しい小貝であろう。私はその重みさえない微かなものを掌に置いて、ためつすがめつうつつを忘れた。

芭蕉もおそらくこれを手にしつこくしんだことだろう。西行にちながる歴史をかりそめならず思いながら……。

越後路、出雲崎

加賀、越前の研修旅行には、「ほそ道」研究の權威久富哲雄氏の同行案内の労を煩わしたが、越後路の旅には本学文芸科の先生だった新潟大の浮橋康彦氏から同じ恩恵を受けた。

新潟大教育学部の近くの海岸に出ると、近年海の浸蝕が甚しいところで、名だたる砂丘はそれほど厚くもない防砂林を残してほとんど失われ、その削られた砂丘の端を怒濤がじかに噛んでいた。一部残っている防波堤の所では波しぶきが数メートルほども立ってさアッとこちらに降りかかり、荒海の実感があった。

前面やや左よりの海上にはまぎれもない佐渡が島が、傾きかかった秋の日をうけて淡い紺青色のどっしりした姿を浮かべている。山のひだも見え、大佐渡小佐渡の別もはっきりしている。それにしてもその大きさは意外だった。私の生れ故郷の小田原の浜べからは晴れた日に伊豆の大島が見えたが、海上はるかに、二メートルの感じだ。それがここに見える佐渡は半島でも近々と迫っているかのようなのだ。「ああ佐渡は大きい」と私は嘆息ともなくつぶやいた。

この砂丘の林の中には北原白秋の童謡「砂山」を刻んだ碑や、坂口安吾の文学碑などがあった。「砂山」は幼い寂しさをそる歌詞で忘し難いものの一つだ。

芭蕉は「おくのほそ道」では越後路の条で思い切った省筆をしているが、曾良の「随行日記」によれば、新潟では泊る所がなくて困惑したのが大工源七という者の母の情けで雨露を凌ぐことができたことがわかる。この地で得た句と伝えられるものに、

海に降雨や恋しき浮身宿

がある。そのことを録しその句を刻んだいわゆる芭蕉堂という名の石とコンクリート造りの、草庵を模したらしい不思議な記念塔が例の砂丘上にある。

「浮身宿」とは、この句を初めて収めた菊岡沾涼の「藻塩袋」という俳書の注記によると、旅商人などの滞在中一時的にかしづく賤しいなりわいの女が浮身でその家が浮身宿だとされる。しかし一説には浮身は下級の遊女のことだともいう。いずれにしても春をひさぐうらぶれの女にはちがいない。句意に関しては、長雨に足留めをくって長逗留となり女への情の深まる旅商人の心をよんだとする安東次男氏の新解釈も出されているが、古来の解のように、海面に寂しく降り込む雨をながめて、待ち人恋しい（あるいは浮世恋しい）気持に沈む遊女の境涯に感情を移入した詠吟とみるほうが哀れも深いと思う。

同行の浮橋さんの話によると、新潟は古来遊女の名所としてたいへん有名であつたらしい。芭蕉はまずその結びつきに心を動かされたが、またここで遊女の姿もかいま見たらうし、源七母の話などでその哀れな境涯にいたく心を打たれたにちがいない。その人の世のかなしみを一身に背負うたようならぶれた越路の遊女のおもかげを深く心にしめて、越後路の旅の間じゅうしつこいほどにその思い

を追いつづけたというのが私の推理である。

さて『おくのほそ道』で越後路が省筆されていることの理由はいろいろ憶測されているが、なんといつても天候や芭蕉の健康状態、それから知り人のない土地の事情からして、芭蕉はこの旅中で最悪の状態にいたと考えるべきである。天候としてはこの地方特有の暑熱と温気がひどいうえに、雨がよく降った。芭蕉も旅の疲れが出てきていた上に、この気候にやられて気分すぐれずいらら状態だったとみられる形跡がある。本文に「暑湿の労に神をなやまし病おこりて事をしるさず」とあるのを虚構の文飾とする説もあるが少なくとも前半は本当だと思う。その上に宿もろくに得られぬという状態だから、強い旅愁に悩まされたにちがいない。「浮身宿」の句にそれが反映している。

さらにその旅愁が凝り昇華したともみられるものが例の「荒海や佐渡によこたふ天河」の句である。だからこの一代の絶唱は、春秋の筆法でいえば、越後路の旅の悪条件が生んでくれたものといえなくもない。また一見のびやかな「文月や六日も常の夜には似ず」の句にだってそれはひびいている。

ところでもう一度遊女のことに戻るが、芭蕉は出雲崎を過ぎた高田で、風雅をたしなむ医師細川春庵の家に立ち寄り、

菜欄さいらんにいつれの花をくさ枕

の句を残している。「菜欄」は菜草園の意、季語は「草の花」で秋。「草枕」は旅の意と、花咲いた菜草を枕に寝る意とを二重に表わしている。どの菜草の花を選んで旅の疲れをいやすべきか、菜草の種類も多く迷うくらいで、この家の主人（医師）の厚情がありがたい

という挨拶の句である。挨拶であるがなかなかいい句で、やはり旅中の病気の気持が自然と出ている。それと、人によると遊女の面影がほのめいて感ぜられるというが、「花」や「枕」というところにやはりそういうなまめいたにおいもまつわっているようである。

旅の遊女と同宿し同行を頼まれたという『ほそ道』随一の色どりが出ている市振の宿の挿話は有名だが、これこそ抱きつづけた越路の遊び女の幻を、越後路も果てのわびしい地を選んで、実象化した虚構の創作ではなかったか。こう断ずるのも、芭蕉の心理の展開を追うてきたおのずからの論理的帰結だと私は言いたいのである。

そこに添えられた「一家に遊女もねたり萩と月」の句であるが、我れも遊女も旅ゆくわびしい境涯であり萩と月とは自然の中にうつろいゆく無常の存在というような旅の観念を潜め、女性美を萩の花に暗喩して優美な感じもあるが、ただこの句には意外と切実な旅愁と哀感とがない。けだし旅中に得た句でなく、後の『ほそ道』執筆の時点での作句ではあるまいか。あるいは本文の創作も同じ時であったとしてもさしつかえない。

そしてここで遊女のことをこれだけに書いてしまったとしてみれば、越後路で書きたいことはいくらも残らなかったのではないか。相当の分量書かれていた越後路のくだりを朱で抹消した芭蕉自筆の『ほそ道』草稿を見たという人の所伝があるが、これもあながち無根といえないような気がする。新潟の事や「浮身宿」の句も一度は書かれ、そうして消されたのかもしれない。

とにかく、かくて越後路を代表して録されている二句、

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天河

は重要な意味を持っているとせねばなるまい。特に「荒海や」の句に旅愁が深くこもっていることは、芭蕉自筆の「銀河序」によっても明らかであるが、同時にここには新瀉で得た遊女の悲しみから尾を引いた逢えざる恋の嘆きが影を落しているように思われる。

曾良の『俳諧書留』にはこの句の前書に「七夕」と記している。「天の河」は天象としての銀河を示すことはもちろんだが、中国の伝説をうけて和歌の長い伝統を通じて七夕の星合を表わす恋に関する歌題となった。俳諧でもこれを引継ぐ季題として用いられた。この句を七夕の宵の恋の心を詠んだものと解すべき根拠は十分にある。そこでここでよみとれるのは、天上の女夫星が一年一度の逢瀬を楽しむという今宵も、佐渡が島に流罪となつた人とその恋人や眷族とは、荒海に隔てられ悲しいさだめに障えられて、その一度の逢瀬すら許されぬという、芭蕉が旅愁のなかでしかととらえた悲しみなのである。

しかも眼前に存在するかの寂寥凄壯を極めた大自然の景観と、この悲愁慟哭の心緒とが、こよなくみごとに交響して、読む者の琴線に高鳴りを生ぜしめ、自然・人生の永遠の寂しさと永劫の悲しみを味わわせてやまない。

この句は研究家によれば七月四日出雲崎での詠吟で、この季節の实景と相違するとか、七月六日今町（直江津）での吟である「文月や」の句と制作順序が逆だとかいろいろ説があるが、芭蕉の詩的眞実はそんなことを超出している。

「文月や」の句は、星合前夜の色めく空のけはいと人の思いありさまを詠んだものだが、恋の悲しみを忍ばせ、旅愁の心とかよいあし、
「荒海や」の句の前奏曲として微妙にうつりあっている。

さて、新瀉を出て弥彦に詣でたりして出雲崎には午後おそく着いた。ここでは芭蕉よりも良寛が看板である。良寛が晩年身を寄せた和島村の木村家を訪れ遺品を見せてもらった後、丘陵地に立つ良寛記念館を叩いた。良寛と芭蕉の違いなど頭を去来した。記念館の後庭から出雲崎の町が眼下に見えた。四角な低い屋根々々が海べへばりつくように身を寄せ合い細長く続いている。雨が降りだし、海は薄鼠色に煙り、晴天なら見えるという佐渡の影もない。

わびしいたそがれの漁師町。その道端のささやかな公園に「銀河序」と「荒海や」の句とを刻した句碑がひっそりとあった。筋向いの家が芭蕉の泊った旅館の跡らしいなど聞きながら、その脇の、家と家の間の細い露地を抜けて海べりに出た。

突堤に囲まれた漁港の静かな渚には海藻がちらばり、磯臭い香が雨の中にたちこめる。片側には水中まで張り出すように築かれた石垣様の土台に乗って納屋がいくつか連る。土台の根もとには夕潮が物影を蒼く沈め、水面には雨が微かな紋をつくる。

暮れてゆく越の海の寂しさ。旅のうれいが果てしなく胸をしめつける。芭蕉は「夕ぐれのさびしさ感に堪たり」と後の種の浜で書いたが、ここ越路の夕暮の海の寂しさこそはもっと深く、言語に絶していたのではなかったか。

人の世の哀れを遊び女の幻とともに追いつづけて旅してきた芭蕉の悲しみがここで高潮に達し、かの名吟を生んだことを疑いないものと私は思い知った。